

～ 新見賞 ～



秋山 麻里

略 歴

昭和49年12月13日生
平成12年3月 広島大学医学部卒業
平成22年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（発達神経病態学）修了
平成12年4月 広島大学医学部附属病院小児科 医員（研修医）
平成13年4月 広島県立広島病院小児科 医師
平成16年4月 JA広島厚生連府中総合病院小児科 医師
平成18年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院小児神経科 医員
平成22年4月 トロント小児病院神経科 リサーチフェロー
現在に至る

研究論文内容要旨

Dravet症候群は、小児期に多彩で難治な発作が出現し、知的予後不良なてんかん症候群である。この疾患の小児期から成人期まで長期にわたる経過の全貌は未だ明らかではないため、我々は詳細な臨床脳波学的検討を行い、この問題を解明することを企図した。

対象は、小児期から成人期に達するまで観察し得たDravet症候群31例（典型群14例、辺縁群17例）である。追跡時における発作の状況、日常生活動作、知能・生活状況を聴取した。全例で最終追跡時からさかのぼって1年以内に脳波検査を実施している。追跡時に発作が少なくとも1年間消失している群と残存している群に分け、各種臨床因子との関係について統計学的分析を行った。

思春期・成人期において典型群、辺縁群の臨床像は概ね似通っていた。小児期において発作は全例で難治であったが、最終追跡時には5人（16.1%）で発作が抑制されていた。7歳以上の時点で記録された全身けいれんの発作時脳波40発作のうち35発作（87.5%）が部分起始であった。発作抑制群には、特にけいれん性てんかん重積状態が3回未満で少ない例が有意に多いことから、遷延するけいれんをできるだけ早く抑制してけいれん性てんかん重積状態への発展を防ぐことが、発作の長期予後を良くするために特に重要と考えられた。知能予後に関しては、比較的知能がよい群は、追跡時脳波に後頭部 α 律動を認めたが、けいれん性てんかん重積状態の頻度との相関は認めなかった。発作予後ばかりでなく、知能予後も含めた全体的予後の改善のためにさらなる治療法の開発が望まれる。